

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査事業報告 第2冊

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線
(一般国道170号) 建設に伴う

福瀬遺跡・仏並遺跡

—— 試掘調査事業報告書 ——

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

1986. 8



序 文

福瀬遺跡・仏並遺跡は、和泉市南部に位置し、北は泉大津市・高石市・堺市と西は、岸和田市と東は河内長野市の各市と接し、南は和泉山脈を挟んで和歌山県と接する。

両遺跡は、榎尾川が和泉山脈を開折して作った横山盆地の沖積段丘面に位置している。

この横山盆地は、古代より『和泉国』『河内国』の交通路並びに榎尾山施福寺・金剛寺の参拝路等の交通の要衝の地であった。

このたび、大阪府土木部より主要地方道枚方・富田林・泉佐野線（国道170号）の建設に先立って、和泉市福瀬町・仏並町の地域について、埋蔵文化財包蔵地がどのように所在しているか範囲を確認する調査依頼を受けて両遺跡の試掘調査を実施した。

なお仏並遺跡については、昭和60年6月から11月にかけて発掘調査行った地点から道路を隔てて西側部分を今回調査対象としている。

調査の結果、福瀬遺跡では、トレンチから土師器・須恵器・瓦器等の土器片とサヌカイトの石器などの遺物と、溝・土坑・ピットなどの遺構が検出された。

仏並遺跡では昨年度の調査で発見された縄文時代の集落跡の遺構が検出されずに他の時期の溝・水路・ピットなどが検出された。

以上の結果、当初予想されていたよりは遺跡の範囲が狭くなるがいずれの遺跡についても遺構・遺物が検出されることが判明した。

おわりに、本試掘調査に際して大阪府教育委員会・和泉市教育委員会・大阪府鳳土木事務所を初めとした関係機関ならびに地元関係各位のご協力、ご支援をいただきましたことを深く謝意を表しますとともに、今後とも当協会の調査事業にご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

昭和61年8月30日

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄

例 言

1. 本書は主要地方道枚方・富田林・泉佐野線（一般国道170号）予定地内の埋蔵文化財（福瀬遺跡・仏並遺跡）試掘調査事業報告書である。
2. 調査は大阪府教育委員会文化財保護課の指示のもとに大阪府鳳土木事務所の委託を受けて、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課第5班（班長岩崎二郎）が担当し、技師服部みどりが現地調査にあたった。昭和61年7月1日調査を開始し、同年8月31日に終了した。
4. 本書で用いる遺構の記号は以下の通りである。OP=ピット，OS=溝，OI=水利施設，OX=その他、不明。
5. 本調査事業報告書の作成は、服部が担当した。

本文目次

I. 調査にいたる経過	1
II. 調査区設定	1
III. 調査成果	2
1. 福瀬遺跡調査結果	2
2. 仏並遺跡調査結果	7

挿図目次

第1図 遺跡分布図 ($S = 1 / 10,000$)
第2図 横山盆地の地形 (豊田兼典氏による)
第3図 福瀬遺跡トレンチ配置図
第4図 仏並遺跡トレンチ配置図
第5図 福瀬遺跡層位柱状図
第6図 仏並遺跡層位柱状図

図版目次

図版1 周辺地形	
図版2 福瀬遺跡	第5トレンチ 第7トレンチ
図版3 福瀬遺跡	第8トレンチ 第11トレンチ
図版4 福瀬遺跡	第10トレンチ第1遺構面 第10トレンチ第2遺構面
図版5 福瀬遺跡	第12トレンチ 第13トレンチ
図版6 仏並遺跡	第8トレンチ 第9トレンチ

I. 調査にいたる経過

主要地方道枚方、富田林、泉佐野線（一般国道170号）は、河内長野以北及び泉佐野市～熊取町の区間が供用されており、南河内地区と和泉地区山間部を結ぶ道路建設を残すのみとなった。

本予定路線内の分布調査は昭和48年度、財大阪文化財センターが実施しており、11地点^{註1}の文化財所在地を報告している。又、昭和52年8月現在の大阪府文化財分布図^{註2}においても周知の遺跡として明らかにされている。

近年新関西国際空港建設関連事業となり、当路線の全線開通が図られることになった。それに伴い、昭和60年度に本協会が大阪府国土事務所の委託をうけ、路線予定地内の仏並遺跡の発掘調査を実施した。

調査の結果、縄文時代～中世に至る多数の遺構、遺物が検出され多大な成果を収めている。しかし、路線内で遺跡として周知される他の地点には性格、実態が、十分に明らかにされていない箇所も多く残されている。

今回の試掘調査は、こうした経緯と昨年度の成果を踏まえて、仏並遺跡の西限の範囲を^{註3}確認するとともに、従来遺跡と確認されながら、依然性格が不明瞭のままである福瀬町所在の福瀬遺跡の性格や遺跡範囲を確認することを目的として実施したものである。

なお、トレンチでの発掘調査を始める前に、調査予定地域を数度に渡って現地踏査をくり返し、遺物の散布状況を確認したうえで調査を開始した。

註1 財大阪文化財センター調査報告書

主要地方道枚方、富田林、泉佐野線バイパス（大阪外環状線）予定路線内埋蔵文化財分布調査報告書、昭和48年3月、財団法人大阪文化財センター

註2 大阪府文化財調査報告書第26、27編 和泉横山谷の民俗Ⅰ、Ⅱ

註3 財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第5編

主要地方道枚方、富田林、泉佐野線建設に伴う、「仏並遺跡」発掘調査報告書—1986.3

II. 調査区設定

調査対象区は福瀬遺跡の道路センター杭680から杭108までの東西約540m、仏並遺跡、杭176から杭191までの東西約300mである。

共に東横尾川、横尾川によって開析された河岸段丘地形のため東西でかなりの高低差が

みられる。従って、水路、現在耕作中の田畑を除き各段丘、フラットな面の道路中央部分を選び、 $2\text{m} \times 4\text{m}$ 規模のトレンチを福瀬遺跡15カ所、仏並遺跡10ヶ所設置した。トレンチは西より第1トレンチと配置図は、図3、4に示す通りである。

各トレンチは、原則として耕作土、床土を機械掘削とし、遺構面の平面調査を行い、遺物の包含状態、無遺物層となる地山面迄の遺構埋没深度を確認し、土層断面柱状図を作成した。

Ⅲ. 調査成果

1) 福瀬遺跡調査結果

〈第1トレンチ〉

福瀬戎神社南側の一段低い段丘上に設置したトレンチであり、本調査のトレンチであり、本調査のトレンチ内で最も東根尾川に近い位置にある。現地表T.P.+130.7 mより20~30 cm下は第1層耕作土と第2層の床土である。床土直下に鋤溝状遺構が検出された。4条の溝は、いずれも東西方向で近世の削平を受けたため浅く12~15 cm、幅10 cm前後を測る。埋土内には土師器を若干含むが、細片のため時期の決定は困難である。第1遺構面の下層は、18~22 cmの暗褐色シルト層がトレンチ内均一に堆積しており、須恵器、土師器、輸入青磁、陶磁器等比較的遺物を多く含んだ層である。トレンチ中央から東へ2 mの所よりやや黒褐色ブロックを含む黄褐色粘質土が西へ傾斜して堆積しており、ササカイト片を出土した。土器は含まれない。T.P.+130.0 mより下は地山と考えられる黄褐色砂礫層である。トレンチ東側にこの地山面を切りこむ形で南北方向の溝が1条検出された。幅約26 cm、深さ14~16 cmで埋土には土師器片、瓦器碗片が出土した。

〈第2トレンチ〉

第1トレンチと同じ段丘上の上っているため層序、遺物の包含状況等類似した点が多い。現地表下20 cmまでは第1層現代の耕作土、第2層床土である。床土直下に第1トレンチ同様の東西方向に走る鋤溝状遺構が7条検出された。幅10~20 cm、深さ8~15 cmを測る。埋土内より遺物は出土していないが、遺構面より土師器小皿片、瓦器碗片が出土している。鋤

溝状遺構が検出された下層より須恵器片、土師器（皿、羽釜）瓦器碗片が多量に出土した。第3層は平安時代から中世の時期の遺物が含まれている包含層である。第4層は、第1トレンチの第4層に続くと思われる層でトレンチ西側の方へ堆積している。縄文時代後期から晩期と思われる石鏃・サヌカイト片等が出土した。遺構は伴わない。第5層 T.P.+130.2 m～T.B.+130.0 mより下が地山と思われるやや礫を含む黄褐色粘質土層である。

〈第3トレンチ〉

第1、2トレンチより段丘面が高く、現地表 T.P.+133.8 m を測る。第3トレンチを境にして第15トレンチまで福瀬集落を通る旧村道の北側にトレンチを設置した。

現地表下30～85cmまでは第1層耕作土、第2層床土である。第8層には須恵器、瓦器碗片、陶磁器を出土する包含層が水平に堆積している。水分を含む脆弱な層で掘り下げると水が湧き出てくる。トレンチ北西隅で落ちこみが検出されたが、現地表下1 m掘り下げた時点で地山が検出されず、湧き水で調査が困難を極めたため中止した。上層には陶磁器片を含むが、下層には遺物は検出できなかった。

〈第4トレンチ〉

現地表 T.P.+133.5 m 下65cm 余りは第1層から第10層まで耕作土、床土、旧耕作土、床土層と数度にわたる耕作土の地あげがみられる層である。陶磁器、土師器、瓦器の破片が出土する。第11層に土師器、瓦器を含む包含層が15～30cm 南西へ傾斜して堆積している。中世と思われる包含層の直下は T.P.+132.7 m 前後から暗黄褐色砂礫層の地山である。この礫層は東横尾川による段丘の影響を受けてかトレンチの東南から北西へゆるやかな傾斜をもって堆積している。遺構は検出されなかった。

〈第5トレンチ〉

現地表 T.P.+134.3 m 以下、第1層から11層までの約85cm は、耕作土、床土、旧耕作土、床土、と数回地あげを行ったと思われる堆積層である。第11層のマンガン沈着層内に須恵器1点、瓦器碗1点を含むが明確な遺構を検出したのはその直下第12層である。トレンチの中央より西側に集中してピットを検出した。いずれも柱根は検出できなかった。1-O-P の径30cm を除いて2-O-P から8-O-P まで径は20cm 前後深さ8.5～26cm と様々である。堆土内から遺物は出土しなかったため時期決定は困難であるが、ピット周辺より須恵器、

瓦器碗片が出土していることから、平安時代から中世の幅でとらえることができよう。遺構の広がりが充分考えられるので、平面調査はこの面で中止し、サブトレンチを入れ地山面を確認した。遺構面と地山の間に一層暗黄褐色粘質土がかんでおり断面にピット状の落ちこみが確認できた。遺構面の可納性が強い。地山は砂礫混じり黄褐色土でT.P.+132.9 mより下層と思われる。

〈第6トレンチ〉

現地表T.P.+137.4 mの下50~60cmは耕作土、床土、旧耕作土、マンガン分沈着層の堆積がみられる。その直下は粘質土の地山層と思われる。トレンチの東南隅にやや不定形な円形土壌が地山を切込む形で検出された。トレンチ内、遺構内からも1点の遺物も出土せず時期、性格等不明であるが、おそらく耕作に伴う施設の一のつばーのようなものであろう。遺構の深さは掘り方を含めて70cmを測る。

〈第7トレンチ〉

現地表T.P.+135.6 m下50cmは第1層から第7層まで耕作土、床土、旧耕作土、整地層、床土、旧耕作土、整地層と数回耕作して地上げしたと思われる堆積をなす。第3層の整地層と思われる硬質のシルト層間に土師器、須恵器、染付等の雑多な遺物を含むが他の層からは一切遺物は含まれない。トレンチの北西隅T.P.+135.5 mでやや不整形な円形を呈したピットが切り合って検出した。径は8-O Sの5.0cm、7-O Sの26cmを除きは1-O Sから6-O Sまで径約30cmである。上層の整地層で削平を受けたためか深さはいずれも2~6cmと浅く、埋土内に遺物は出土しない。遺構の性格、時期を把握することは困難である。トレンチの東側に落ちこみがみられるが自然の落ちこみか、人為的な土坑なのか不明である。やや暗褐色がかかった粘質土が堆積する。遺構面の直下は、地山の黄褐色粘質土である。

〈第8トレンチ〉

現地表T.P.+135.9 m下第1層から第4層まで20~25cmは耕作土、旧耕作土、床土、マンガン分沈着層と水平に堆積している。第5層はオリブ褐色粘質シルト層で須恵器、青磁を出土する。包含層直下にトレンチ中央から西にピットを検出した。径は15~30cmまで様々あり、深さは20cm前後を測る。南西隅には溝遺構も検出された。埋土内より遺物は出土していないが、遺構面より土師器、瓦器が出土していることより中世の遺構と考えられ

る。遺構面の下層は第7層暗褐色粘質土が15~20cm堆積しており縄文時代後・晩期の石鍬が1点出土している。第1、第2トレンチの第4層に相似している。他に遺物等は、含まれない。地山面はT.P.+ 135.0mより深さを含む層に達する。

〈第9トレンチ〉

現地表T.P.+ 137.4m下20~35cm第1層耕作土第2層床土が堆積している。床土内には土師器が出土するが、細片のため時期は不明である。床土を除去するとトレンチの南東隅から北へ向けて溝が1条蛇行して検出された。幅10~18cm、深さ3~10cmと浅く埋土内には遺物は含まれないが、遺構面は土師器、瓦器椀片が出土しており中世の溝と思われる。遺構面の下層、第4層は灰色ブロックを含む黄褐色粘質土層でわずかに土師器を出土する。地山面は、包含層直下T.P.+ 136.3mで黄褐色粘質土が検出される。

〈第10トレンチ〉

現地表T.P.+ 138.7m下12~15cmは第1層耕作土、第2層床土である。陶磁器を含む床土を除去すると直下に溝、ピットが検出された。溝は第9トレンチ同様4条、いずれも南東隅より北東方向であり、幅5~20cmとやや細く深さは5cm前後で浅い。1-O S内には土師器小皿の細片が出土した。遺構面を掘り下げると1-O Sの下層は同方向でやや幅広く石組みの溝が検出される。この第2遺構面より瓦器椀、土師器等が出土した。T.P.+ 138.2mで地山面と考えられる。遺構の検出された下層は砂の堆積がみられる。

〈第11トレンチ〉

現地表T.P.+ 140.8m下15~20cmは第1層旧耕土、第2層床土である。トレンチの東側床土直下にピットが検出された。いずれも径25~30cm前後、深さ10cmを測る。家屋の移転跡でトレンチ全域攪乱を受けており遺構の残存状態は極めて悪い。第4層T.P.+ 140.4mで地山に達する。遺物は出土しなかった。

〈第12トレンチ〉

現地表T.P.+ 142.2m以下60cmは第1層耕作土第2層床土、第3層整地層の堆積がみられる。トレンチ中央より北の整地層直下にピットを検出した。地形は南北に傾斜しており、遺構は高い北側に集中している。1-O Pから3-O Pは、径約30cmのやや不整形な円形

を呈し、深さは18cm前後を測る。4-O Pから7-O Pは径15~20cm、深さは15cmを測る。埋土内に遺物は検出されなかった。遺構面直下はT.P.+ 141.3mより黄褐色粘質土地山層に達する。

〈第13 トレンチ〉

現地表T.P.+ 142.1m以下50cmは、第1層耕作土、第2層床土、第3層整地層の堆積が水平にみられる。トレンチの東側の地山直上に溝遺構が南北方向に1条検出された。石組みがみられ、暗渠の働きをしたものかと思われる。現在でも水が湧き出ており南北に同様の溝が続くと思われるため、実測後、現状のまま埋め戻した。この溝には細片であるが土師器が検出された。T.P.+ 141.5mで地山面と考えられ、湧水のある黄褐色粘質土がみられる。T.P.+ 141.1mで礫層に変化する。

〈第14 トレンチ〉

現地表T.P.+ 142.3m前後より下層は、50cmの盛土層を除去後、1m以下もなお現代の擾乱層のため調査を中止した。第14トレンチ西側に確認トレンチとして2m×2mのトレンチを設置したが現地表下50cm、第1層耕作土、第2層床土、第3層整地層の直下は地山面に達する。遺構、遺物は検出されなかった。

〈第15 トレンチ〉

本調査区、東端のトレンチである。現地表T.P.+ 141.0m下50cmは、第1層耕作土、第2層旧耕作土、第3層床土、第4層マンガン分沈着層と水平に堆積しており、遺構、遺物は検出されなかった。地山面は、T.P.+ 140.6mでやや礫を含む黄褐色粘質土に達する。

《ま と め》

福瀬遺跡に設置した15箇所のトレンチを大きく3つのグループに分けることができる。戎神社南側に設置した東横尾川に最も近い一段低い第1、2トレンチ、現在大半が田地となっている段丘上、比較的東西に平坦な広がりをもつ第3~10トレンチ、山の斜面の影響を受けている第11~15トレンチに大別することができる。府道枚方・富田林・泉佐野線の北側にそびえる山の斜面から東横尾川にむけて、開析谷による段丘が連なり、各々の平坦面上に東西方向の面をもちながら南へ下っていく。

第11～15トレンチは耕作土層、床土層の他明確な包含層をもたず遺物が1点も出土しないことより時期の決定は困難であるが、床土直下にみられるピット・溝等は、比較的新しい時期、近・現代の遺構と思われる。数度の踏査結果もわずかに土師器、陶磁器を採集できただけの、空白に近い地帯であり、付近に遺構の存在を想定することは現状の資料では困難である。

第3～11トレンチまでは、比較的時期の限定される遺物を包含する層があり、遺構も奈良、平安から中世の範囲に含まれる時期と思われる。特に第5～8トレンチは、福瀬村の旧街道に接した集落の可能性もあり、遺構の性格、範囲を知る上で周囲の調査による結果を待ちたい。この集落部分と思われる東、西のトレンチには数度にわたる耕作土層の堆積が確認されるため、古代より開発の盛んな部分であったと思われる。この付近は朝大版文化財センターによる分布調査の第9地点に該当するところで、集落跡の可能性を認めると報告がなされている。当協会で行った数回の踏査でも集中して遺物の散布がみられたところでもある。また、第8トレンチの地山直上では縄文時代後・晩期と思われる石鏃が出土しており、T.P.+ 135.0 m前後は、周囲に縄文時代の遺跡が存在している可能性が強い。

第1、2トレンチは縄溝状遺構の他、中世包含層及び縄文時代包含層が確認され、この付近にも遺跡の存在が充分想定できる。

福瀬村は、古くから交通の要所として開けていたところであり、中世・横尾山（施福寺の信仰）の全盛期にはかなり栄えた集落であったと思われる。

2) 仏並遺跡調査結果

〈第1トレンチ〉

今回の調査区の最西端に位置するトレンチで、現地表面T.P.+ 136.6 mと最も高い。耕作土を除去するとT.P.+ 136.4 mで無遺物層に達する。地山と思われるこの層は、砂混じりの黄褐色粘質土、砂層と埋積谷である様相をみせる。遺物包含層は認められなかった。

〈第2トレンチ〉

第1トレンチ同様に、耕作土を除去するとT.P.+ 135.2 mで地山面に達する。耕作土直下は黄褐色砂質土が認められ、掘り下げるにつれ青灰色の砂層になる。遺物は出土しない。

〈第3トレンチ〉

現地表下16~34cmは耕作土である。下層より南東から北西方向のやや幅広の溝が一条検出された。幅22~64cm、深さ5~10cmと不定形な溝で埋土内、トレンチ内から出土遺物が認められないため時期の決定は困難である。遺構面の下層は全面青灰色の砂層が堆積しており第1、2トレンチ同様、耕作土直下T.P.+ 134.4mより地山と考えられる。

〈第4トレンチ〉

現地表下16~34cmは第1層耕作土、第2層床土である。第3層はT.P.+ 138.8m下より約20cm堆積しており灰色ブロックを含む粘質土層内に土師器が出土する。細片のため時期は不明である。地山上面に遺構は検出されなかった。地山と思われる黄褐色粘質土層の上層にトレンチ東側のみ、わずかながら礫層がみられる。

〈第5トレンチ〉

現地表下20~40cmは第1層耕作土、その下層に床土10~16cm堆積している。他の耕作土層、床土より厚く堆積しているため、包含層を削平した可能性も充分考えられる。床土の直下は第3層T.P.+ 133.2m下より黄褐色粘質土地山層と思われる。T.P.+ 132.8m付近で水が湧き出す。遺物、遺構は検出されなかった。

〈第6トレンチ〉

現地表下40~48cmは、第1層耕作土、第2層床土、第3層マンガンの沈着層が水平に堆積しているのが認められる。第4層土師器片を含む灰色ブロック粘質土の包含層がトレンチの南東から北西にかけて北へ傾斜しながら堆積している。T.P.+ 133.3m下より黄褐色粘質土地山層になり、T.P.+ 133.0m付近から小石、中礫が混じる粘質土へ変化している。遺構は検出されなかった。

〈第7トレンチ〉

現地表下60cmは、耕作土、整地層、旧耕作土、酸化鉄、マンガンの沈着層が堆積しており、数度の耕作による地あげが考えられる。第6層から第7層は共に土師器、須恵器、瓦質土器を含む包含層であるが、第7層はやや粘質土である。包含層直下で礫を含む地山層に達する。第7トレンチの現地表面はT.P.+ 134.2mとやや高いが地山面はT.P.+ 133.4mと第

4～第6トレンチとさして変化のない高さで検出される。遺構は検出されなかった。

〈第8トレンチ〉

現地表下10～34cmは第1層耕作土である。その直下に第2層やや砂混じりの礫層がトレンチの南東から北東隅の一部分だけに10～20cm堆積している。人為的な堆積か自然堆積かは不明である。第3層はT.P.+ 132.6 mで黄褐色粘質土の地山面に達する。T.P.+ 132.0 m付近より水が湧きでる。遺物、遺構は検出されず、明確な包含層の堆積はみられない。

〈第9トレンチ〉

現地表T.P.+ 131.2 m下20～30cmは第1層耕作土であり、直下に地山面を切り込み形で水利施設と思われる溝遺構が検出された。溝の底部には石組みがあり、現在でも水が湧きでくる状態である。溝の幅24～50cm、深さ30cmを測る。埋土内には土師器片、瓦器破片を含むので、上限は中世をさかのほるとは思えない。しかし、この遺構面にサヌカイト片も混じっており耕作によって付近のさらに古い包含層が動いた可能性も考えられる。第9トレンチは平坦地がつづくため、検出した水路に伴う遺構の存在が考えられよう。第4層はT.P.+ 130.9 mでやや礫を含む黄褐色粘質土の地山層に達する。

〈第10トレンチ〉

昨年度調査した仏並遺跡に最も隣接したトレンチである。現地表T.P.+ 129.6 mを測る。第1層、第2層は耕作土と床土であり50cm堆積し、土師片を若干含む。床土の直下はT.P.+ 129.1 mより粘質土の地山層に到る。地山直上で遺構は検出できなかった。

〈ま と め〉

仏並遺跡においては、今回の試掘調査では明確な遺構は、ほとんど検出されなかったが各トレンチで得られた知見を簡単に概観しておきたい。

調査区西端に当たる第1～8トレンチは東へ傾斜する山の斜面部分に位置する。これらの平坦な部分は斜面高位側をテラス状に削平し現在、畑地として利用されているところである。削平は1.7 mにも及び旧地形を留めておらず、遺物も検出されなかった。旧耕作土層

直下には、砂層が認められ埋積谷であったことを窺わせる。

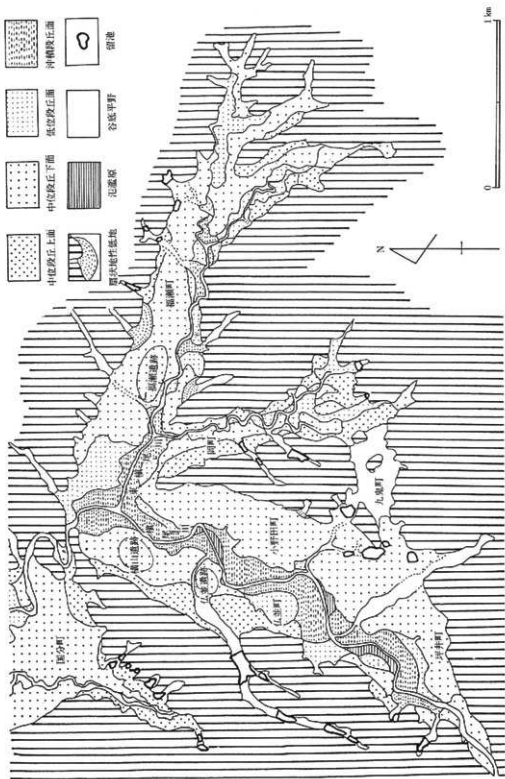
第4～7トレンチは東へ傾斜する比較的なだらかな面に位置しており、付近には北東へ流れる自然流路、水路が多数存在する。耕作土直下に土師器等を含む包含層が認められることから、T.P.+ 138.2 m～T.P.+ 138.8 m付近に広がる南北の平坦な部分に何らかの遺構の存在が考えられる。第4トレンチ以降、地山層は黄褐色粘質土になり、第8トレンチ迄で検出された砂層は検出されない。

調査区東端は、現状では段状の地形を呈しており、各段ごとに第8～10トレンチを設置した。各トレンチともに耕作土直下で地山面に至り、その間に明確な包含層は介在しない。第9トレンチでは地山上面にサスカイト片等の遺物と溝一条検出され、付近に関連遺構の存在が想定されるが、耕作に伴う刮平は著しく、时期的な下限は中世～近世におよぶ。

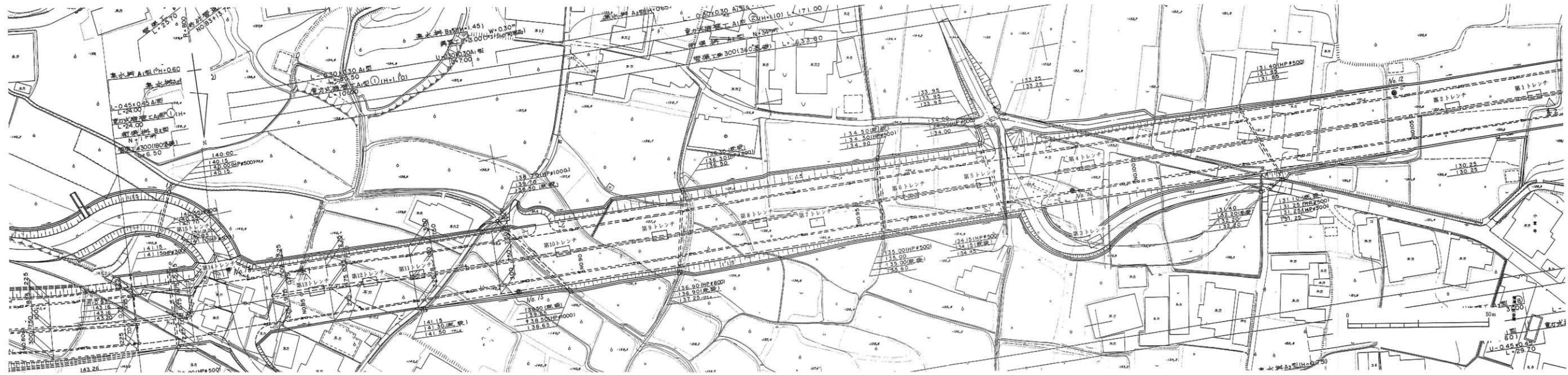
以上のように2 m×4 mのトレンチ10ヶ所による断片的な試掘調査から明確な遺構、遺物は検出し得なかった。又、昨年度調査区と関連であるが、主要地方道枚方、富田林、泉佐野線をはさみ、西側に一段高くなる今回の試掘調査地点からは、縄文時代の集落跡遺構・遺物が検出されなかったことは、集落跡の西端は、環道路附近までであることが推定される。



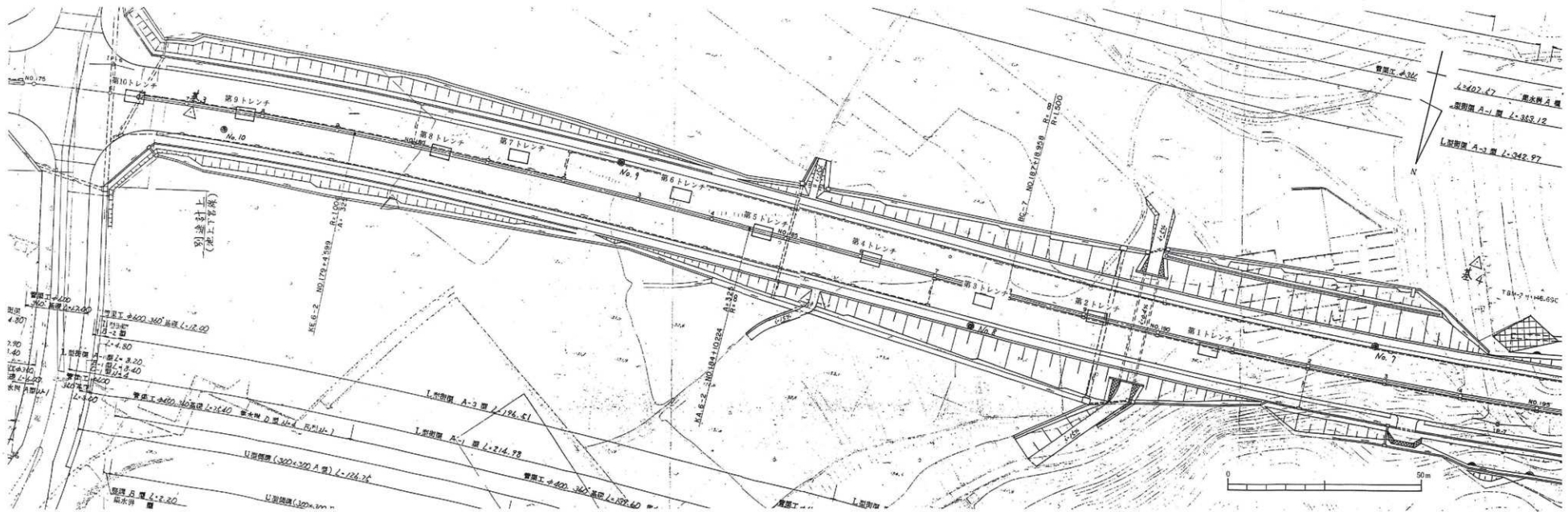
第1図 道跡分布図 (S=1/10,000)



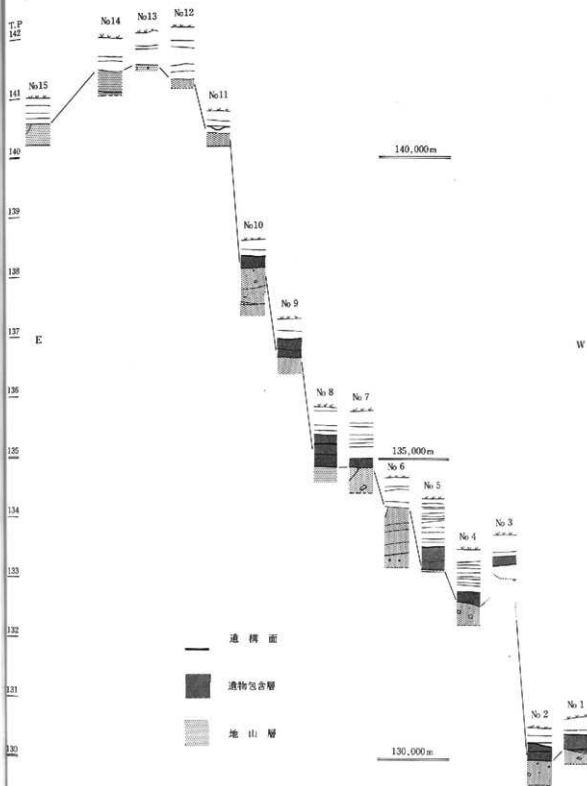
第2図 横山盆地の地形（豊田兼典氏による）



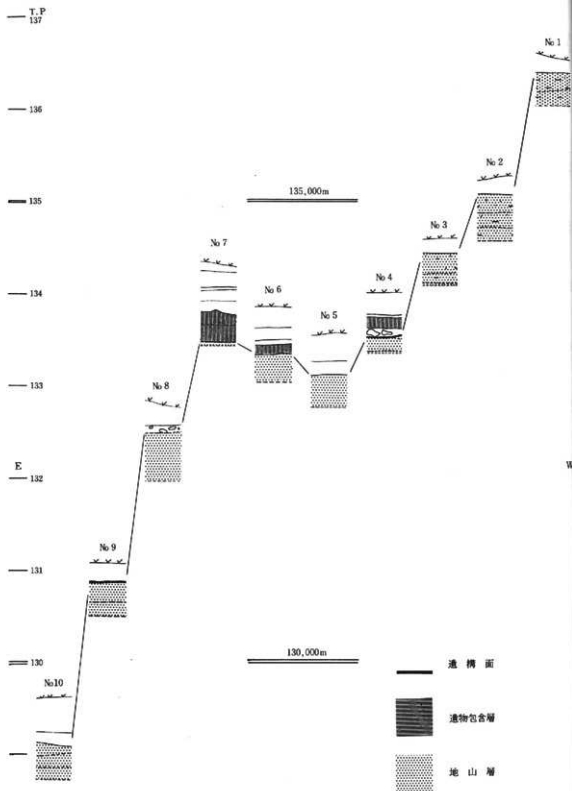
第3図 福海遺跡トレンチ配置図



第4図 仏並遺跡トレンチ配置図



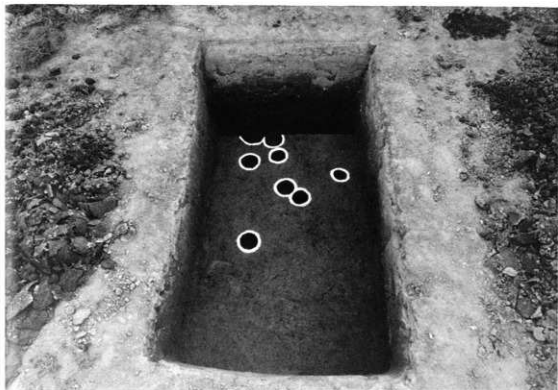
第5圖 福藏遺跡層位柱狀圖



第6圖 仏並遺跡層位柱状図

版 圖

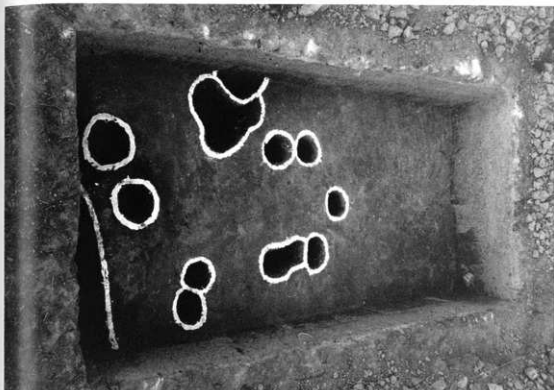




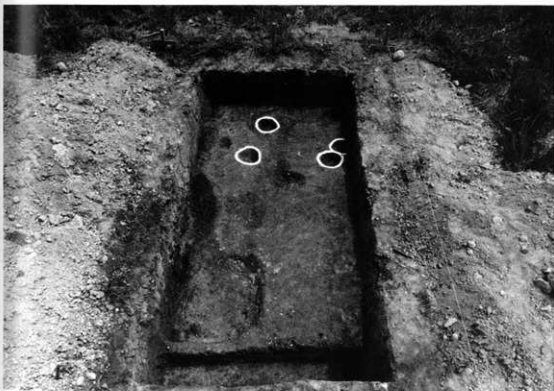
第5トレンチ



第7トレンチ



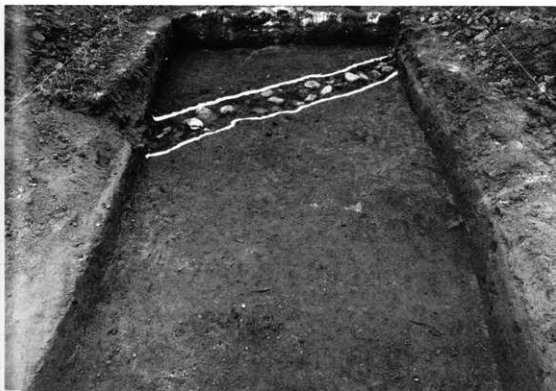
第8トレンチ



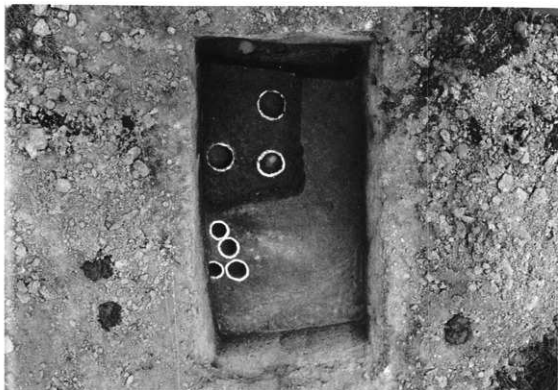
第11トレンチ



第10トレンチ第1遺構面



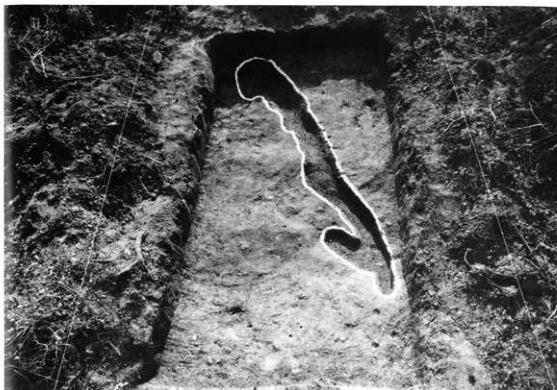
第10トレンチ第2遺構面



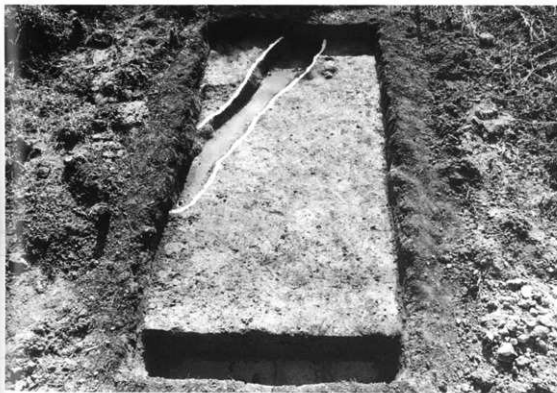
第12トレンチ



第13トレンチ



第3トレンチ



第9トレンチ

